

heisei16

# 六花

*Rikukwa haikukai*

9

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba  
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki  
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana  
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho  
凧 ohdako no orikite kusa no iro to naru  
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura  
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku  
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi  
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana  
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka  
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri  
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryouyaku ni

*designed by Asuka*

訪 戴



山田六甲

エスタシオンイヨノマツヤマかき氷  
星を見に帰つて来しと墓洗ふ  
墓洗ひご先祖様を冷やかしぬ  
帰省子と呼ばれしころも生身魂  
蚊帳の海酸素ボンベの切れてけり  
炎 昼 や 大道芸 の 火 の 手 玉  
葡萄とはキャンベルのこと絶滅種  
この暑さ死ぬほどつらしと若者は  
西日かな眉毛を立てて貌しかめ  
無花果を指もて裂けば臍痒き

夕風の西日光は耕三寺  
マネキンのやうな脚して西瓜食む  
干梅の筴抜けてくる風下に  
埋め立てて魚の学校夏休み  
バザールの香水を名で選みけり  
蜘蛛の糸平凡にして明日の来る  
湧川に冷やせと瓜を無人売

マリンのキ・ココネ・ベリー・ワルツ

目が明いて三つ子の走る夜の秋  
鳩の脚赤し赤しと秋立ちぬ  
蓑虫にぶら下がりゐる故郷かな  
心音はココネと読むか秋簾  
不即不離秋の立ちにけり

不即不離(つきすぎずはなれず)

柿若葉

二 瓶 洋 子

柿若葉柿の葉鮎のために摘む  
黙然と朝餉いたたく河鹿笛  
山裾の池に日移り燕子花  
年金を引き出しに行く更衣  
栗の花踏みしだかれし垣の外

花蜜柑

鳴 海 清 美

惜春や卓に貝殻砂こぼす  
花アカシヤ目さましといふ飴貫ひ  
友呼べば近づいてくる通し鴨  
手のねぼり冷ましてゐたるレース編み  
野ざらしのコンテナ一個花蜜柑

いち抜けて

中 村 房 江

いち抜けて帰るつくつくぼふしかな  
スカートに膝に猫の毛月を待つ  
ことづてをひとつ頼まれ薄かな  
望の夜の裾丈さはに着付けたる  
まろび寝の畳冷たし鬼城の忌

さっきまで

松 山 律 子

体操のガラで今年の夏エンド！  
ん！そうだ 秋になったらはじめよう  
白骨の泉 質疑 惑 薬 刈 り  
赤トンボそこはパットのライン上  
さっきまで誰か居た椅子秋の風

# 肩車鉾より高く撮りにけり

水谷ひさ江

葛布吊り目に極楽の余り風

夕顔や天外望む懸魚の穴

風よぎる度になかなか湧きあがる

十年の時改めて墓洗ふ

※葛布は「くずら」「懸魚は「げぎよ」

「鉾」だけで季語になるかしらと心配したのじやが、江戸時代の其角先生も「鉾にのる」なんて句を詠んでらつしやるからいいんでしょう。カメラアングルの加減で掲句のように写真が撮れたのかもしれないけど、それよりも、お父さんに肩車された子供は祇園祭の鉾よりも高く感じていたんだね。そこを詠んだのですよ。高い高い肩車の子供は嬉しげでホコらしげなんだよね。

# 楳木集



住吉の御田

小田 元

鉦鳴つて御田の牛の尿かな  
うつむいてピアスの光る御田植女  
句を案ずともなく御田植女眺む  
花街の田植女さのみ美女ならず  
御田植風の素通りしてゆきぬ

夏へ

岩松 八重

痒みより解放されし芽吹きかな  
翻車魚まんぼうのどうでもいいよな眼の五月  
緑風に英語の語尾のよく似合ふ  
濃く淡く迫りてきたる夏の霧  
風船虫夢浮かせしか沈めしか

郭公

貝森 光大

郭公の声置いて去る休耕田  
外ヶ浜一湾撓たわめてヤマセ吹く  
何百の何千の血や蠅叩き  
境界線越えては戻され花南瓜  
石一個断固と座り炎天下

会員作品

平居 濤子

# 六花集



林 裕美子

松本 安弘

鉄線花のからんだ糸をついと引く  
白百合の蕾に見下ろされにけり  
ジーパンの真青の扇取り出す  
長電話しかる立場に梅雨晴間  
あご上げてバイク走らす聖五月

夜の薔薇ためらひもなく墮ちにけり  
消灯の刻より香る女王花  
母の背の透けるごとくに床緑  
臨月や紫陽花の毬光抱く  
父を愛す人を愛して桜桃忌  
十葉を干して軒端に風生まる  
鳥けもの罅へ帰る梅雨ごもり  
目覚むるや虫歯に沁みる梅雨始め  
梅雨雲の走り出したる岬かな  
額の花母に十九の写真あり



## 六花集（会員作品）から

あご上げてバイク走らす聖五月 林 裕美子

聖五月の基本季語は「五月」。詩人の木下李太郎は好んでこの言葉を使った、と飯田龍太は言う。緑に包まれて、まさに夏来るといふ感じの季語。バイクを走らす現代の若者は昔と違って何故かアゴを上げていてように思う。そこを作者はすかさず捉えたのだが、そこが鋭い。

昔のバイク姿はやっぱりアゴを引いて必死に走っていたんだらうと逆に想像をさせてくれる言葉の魔術。

父を愛す人を愛して桜桃忌 平居 滯子

作者のお父さんは元朝日新聞の有名な記者だった人。その父を愛していた人を愛したというのだ。作者が愛した人が父を愛するようになったのか、父を愛する人だったからその人を愛するようになったのかは判らないが、多分両方だらうと思う。愛するとは尊敬するということも含んでいるように思えるのだ。

隣り合ふ植田幾日違ひなる 射場 智也

植田の苗が根付くころ、田毎に微妙な成長の違いがあるという。その違いは、植えた日にちが幾日かの違いであろうと推測しているのだ。だが、農業従事者ならば、たちまちに何日違いかは言い当てるのだから、專業でない作者はそこまで言い切らない。もしこの句、何日違いと明確に言い切ったらどうなるだろうかとも考えられる。

一本道夏の空へと消えゆきし 山の 狸

私は即座にこの句から、東山魁夷の「道」（昭和二十五年作）を想起した。

私ばかりでなく多くの人々が句のような絵画や写真を見た経験があると思う。遠近のあるようで、またその手法を無視したように絵画的なこの作品は、作者の中で確かに遠近法を無視したことから、詩としてこの句は立ち上がってくるのである。

その他の会員の佳句

梅雨雲の走り出したる岬かな

松本 安弘

ひとひらの葉陰に透けるかたつむり

延川五十昭

蚊を叩くふりして触るる男かな

中谷喜美子

蛭の火姉のごときにつつましく

霜寄恵美子

新緑や新人芸子の座に和む

佐原 正子

ひとくちで食べられないよこの苺

ことり

熟年の手をつなぎをり夕蛭

永田 勇

梅雨晴れの猫はゆつたり毛繕ひ

横山 迪子

ランドセル背負ふ姿よかたつむり

延川 笙子

秣桶転がつてゐる芒種かな

新井 裕

ほととぎす鳴いてこの世のさかいまで

菊谷 潔

ひまはりやはるか彼方にまた生まる

出口 誠

手抜きして閃きをまつ蝸牛

三村 昭子

蛭舞ふところ見たしや車椅子

安保 信子

若葉雨古傷のある将棋盤

大上 保子

蜘蛛の糸雨の雫を捕らへけり

破 天 龍

葛の葉の茂りで山路狭めたり

藏重 艶子

ゼラニウム催眠術師の窓赤き

田尻 勝子

幼き日姉と歩いた蛭みち

市成 照一